様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１５日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７年度～２００８年度
課題番号：１９５００６４７
研究課題名（和文）
　ＩＴ社会における育児期のインフォーマルネットワークと世代間関係：日米比較から
研究課題名（英文）
　The Use of the Internet Technology and Family Relationship in Contemporary Japan

研究代表者
　石井クンツ　昌子　（Ishii-Kuntz　Masako）
　お茶の水女子大学　大学院人間文化創成科学研究科　教授
　研究者番号：７０４３２０３６

研究成果の概要：本研究では育児期の母親を対象に、IT（Information Technology）利用とインフォーマルサポートネットワーク、家族との関係について、日米でのインタビュー調査ならびに日本での質問紙調査を実施した。その結果、日米比較では、米国の母親は広い範囲で育児に関するオンライン・ネットワークを作っている一方、日本の母親は地域や実際のつながりに基づいて IT を人とのコミュニケーションの道具として利用していることが示された。首都圏在住の育児期の母親を対象にした質問紙調査では、IT 利用が母親の年齢、夫・両親・友人とのコミュニケーション、夫婦関係、親との関係、育児感情と関連があることが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,500,000 円	450,000 円	1,950,000 円
２００８年度	1,900,000 円	570,000 円	2,470,000 円
年度			
年度			
年度			
総　計	3,400,000 円	1,020,000 円	4,420,000 円

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：家族社会学、生活科学、家族関係、IT 利用環境、母親、インフォーマルサポートネットワーク、育児不安、夫婦関係

１．研究開始当初の背景

(1) IT 利用の普及と社会学における研究：
本研究を開始した平成 19 年頃には個人の IT 利用が一般的となり、パソコンや携帯電話などの IT を利用したコミュニケーションが日常的に行われていた。世界規模でインターネットや携帯電話の利用者が増え、特に日本とアメリカでのインターネット利用率は非常に高かった（総務省,2009：韓国統計庁,2007）。またこうした背景から IT に関連した社会学領域の研究報告も見られるようになった時期である。

(2) 育児期の母親の育児と周囲のサポート
一方家庭での母親中心の育児が孤立し、地域ぐるみでの子育て支援が期待されている。そうした中、育児期の母親が IT を使って周囲の人とのとつながりを持ち、インフォーマルサポートネットワークを作る姿が日常で見受けられるようになった。

２．研究の目的

第一の目的は、日本とアメリカにおいて育児期の母親のパソコンや携帯電話利用の現状について調査・検討をすることである。特に、母親はインターネットや携帯電話をどの

ように利用して、またこれらの利用を通じてどのようにインフォーマルサポートネットワークを形成しているのかを把握することである。第二の目的は、日米の調査結果を踏まえ、日本の育児期の母親の IT 利用の詳細を把握して、母親の育児不安や夫婦関係がインターネットと携帯電話利用を通じて形成されたインフォーマルな育児へのサポートネットワークからどのような影響を受けているかという点について明らかにすることである。

３．研究の方法

（１）平成 19 年度

IT と家族および親役割に関して親の IT 環境とその利用状況について日米でヒアリング調査を実施した。アメリカでは、カリフォルニア州に居住する幼児をもつ母親 10 名に対して 1 対 1 のインタビューを行った。日本では、神奈川県横浜市港北区にある地域子育て支援拠点の施設長とそれを利用する母親 10 名にグループインタビュー調査を行った。

アメリカの母親の属性は、年齢は 23 歳から 31 歳、子どもの年齢は 2 カ月から 3 歳で、全員大学卒、就業している女性である。日本の母親の属性は、年齢は 30 歳から 40 歳、子どもが 1 人の人は 3 名、2 人の人は 6 名、3 人の人は 1 名であった。母親 10 名全員が携帯電話を所有しているが、自分専用のパソコンを所有している母親は 4 名であった。調査期間は 2007 年から 2008 年である。

（２）平成 20 年度

平成 19 年度の調査結果を踏まえ、日本における IT を媒体とした育児サポートネットワークが育児期の母親の育児不安や夫婦関係にどのような影響を与えているかについて郵送法による質問紙調査を実施した。対象は首都圏に居住する未就学児をもつ母親 524 名である。

対象者の母親の属性は、年齢が 23 歳から 45 歳、平均年齢 35.7 歳、子どもの人数は 1 人から 5 人で平均 2.14 人である。子どもの年齢は第一子から末子までで 0 歳から 22 歳の幅があった。対象者のうち 50.5%が携帯電話を所有し、同様に自分専用のデスクトップパソコンは 1.7%、自分専用のノートパソコンは 5.1%の母親が所有している。そして家族共用のデスクトップパソコンの所有は 20.6%、家族共用のノートパソコンの所有は 21.8%であった。調査期間は 2009 年 2 月である。

４．研究成果

（１）ヒアリング調査研究の結果と考察

①アメリカの母親

a.コミュニケーションツールとしてのインターネット

対象者となったアメリカの母親たちはほぼ毎日インターネットを利用しており、オフライン（対面上の）やオンライン上の友人とコミュニケーションをしている。また、インターネット上では、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）、ブログ、チャットなどを頻繁に利用している。しかし家族とはインターネットを利用するより、直接的なコミュニケーションをとっていることが多い。

b.情報収集ツールとしてのインターネット

対象者となったアメリカの母親たちは、インターネットを使って、育児に関連する情報（子どもの発達、病気への対応、しつけ、保育園など）を収集していることが多い。他に情報収集する内容は、主に子どもや家族との旅行やショッピングなどのオンライン情報であった。

c.インフォーマルサポートネットワークとしてのインターネット

対象となった母親たちの多くは、同じように幼児を持つ母親たちとオンライン・ネットワークを持っている場合が多い。具体的には、ほとんどの母親は育児に関するインターネット・コミュニティに加入して他の母親たちと子育てに関する意見交換などをしている。また育児や子どもに関する記事をブログに掲載している母親もいる。

②日本の母親

a.横浜市港北区地域子育て支援拠点施設長（A さん）へのインタビュー

ご協力いただいた地域子育て支援拠点は、「誰でも気軽に立ち寄れる小さな家」という発想から 2005 年に開設された。乳幼児期の子どもがのんびり遊ぶ場所である。東京近郊にあり、商店街が近くにある。また、横浜市の行政が後援している施設である。

本施設の目的は、子どもをもつ親同士の相互関係やコミュニケーションを促進し、それに関連した地域活動を行うことである。施設の特徴は、パソコンでのチャット、親子が遊べるコーナー、子育て相談などを設けていることである。 ファシリテーターが配置され、親同士が接しながらネットワークを作ることができるように親を援助し、また必要で有用な情報を提供している。そして親のためのクラス、ワークショップ、教室が開催されている。地域で親同士のネットワークを作るために、ココマップ・プロジェクトとココメール･プロジェクトという活動が進行している。ココマップ・プロジェクトとは、17,000 人が利用し、インターネットサイトにおいて親に必要な情報（地域の遊び場・自主保育グル

ープの開催場所・家事･ベビーシッター・保育所･幼稚園情報）を提供するために、ネット上のマップに情報を掲載する活動である。ココメール・プロジェクトとは、親同士の地域でのネットワークづくりを目的として、携帯電話を媒体として行っている。

b.施設利用者のグループインタビュー

コミュニケーションツールとしての携帯電話：　携帯電話でのメールの相手は、家族、ママ友（子どもの友達の母親）、近所の人，親しくつきあっている人などである。携帯電話でのメールを使う理由として、手軽で相手が見たいときに接続できるので、相手の迷惑にならない、また簡潔なメッセージで内容が伝わる　（夫の「帰るコール」）などの理由があげられていた。交換する情報は、自主保育グループや幼稚園･保育所、おけいこごとに関する内容が多い。メールを交換する友達の合意の下、メーリングリストを作っていて、「集合時間に遅れます」などの日程や集合場所の変更を伝えるために携帯電話のメールを使って送受信することが多い。

情報収集のツールとしての携帯電話とインターネット：　携帯電話からインターネットサイトにつなぎ、例えば病院に行くための情報（病院の待ち時間を確認、交通機関乗り換え情報）、セールやバーゲンの情報（スーパーマーケットやファーストフードの割引）を得て情報を活用している場合が多い。

社交ネットワークとしての携帯電話とインターネット利用：　携帯電話を使った友人、知り合いなどとのネットワークによって、育児書では対応できないような育児や子どもの行動への個性に応じたアドバイスを得ることができる。また簡単に情報検索ができ、インターネットサイトへの問い合わせにはすぐに回答が寄せられる。更に、緊急事態（子どもの病気など）の時に他の母親、自身や配偶者の親の助けを求めるといった手軽でパーソナルな交流を行いながら連絡をとる頻度が高いことが特徴であった。インターネットについては、コミュニケーションサイトとしての利用　（学生時代の友人同士、子どもの誕生日が同じグループ，育児用品の情報や利用相談など）が多く語られた。

③ヒアリング調査結果についての考察

アメリカと日本におけるヒアリング調査の結果について、比較しながら考察を進める。アメリカと日本において共通している点は、未就学児の子どもをもつ母親は、インターネットを利用して、自分の親などの親族、友人、近隣の知り合い、その他の人など様々な人とのネットワークを広げていることである。

日米での相違については、携帯電話の利用頻度は、日本の母親の方がアメリカの母親よりも多い。そして、地域のコミュニティとの結びつきの強さも、日本の方がアメリカよりも強いことが伺えた。この結果については、日本では地域に根ざした育児支援施設で調査を行ったためであると考察する。

一方で、インターネット上でのオンライン・ネットワークに関しては、アメリカの母親の方が、日本の母親よりも広がりを持っているという結果が見られた。さらにインターネットからの情報収集の多さ、ブログの利用頻度についてもアメリカの母親の方が 日本の母親よりも多いことが示された。

このようにアメリカの未就学児をもつ母親は、インターネット上のオンライン・ネットワークを広く利用し、単なる情報収集をするだけにとどまっていないことが明らかになった。人と人との対面・対人ネットワークを作り、またブログを利用するなどして、インターネットを社会での人とのつながりを作るために活用している姿が多く見受けられた。

一方日本の未就学児をもつ母親のインターネット利用は、情報収集については頻繁に利用し、育児や家事に必要な情報を手軽に得るなどの活用が進み、育児期間の不便さをインターネットの利用で解消しようとする様子が見られた。しかし、社会の人とのコミュニケーションツールとしての活用は、アメリカでの様子とは若干異なる。コミュニケーションという点では、オフラインで実際に知り合った友人や家族との連絡、緊急時に支援を求めるなどに関するコミュニケーションが日本の育児期の母親には多く、対面でのネットワーク関係を強める傾向にあることがわかった。アメリカで見られるようなインターネット上だけでのつながりのようなものはあまり見られなく、近いものでは、育児に関するアドバイスや、育児用品の情報などの情報交換が中心であった。唯一、コミュニケーションサイトにおけるオンライン・ネットワークが利用されている様子がアメリカの母親と同様に見られた。これらから日本の母親においては、インターネットだけでの人と人とのつながりが形成されている様子はあまり多く見られなかった。

（2）質問紙調査の結果と考察

日米でのインタビュー調査の結果を踏まえて、日本の首都圏において乳幼児（未就学児）をもつ母親 524 名を対象に質問紙調査を 2009 年 2 月に実施した。

質問項目は、インターネット機器の保有状況、利用状況、活用意識、インターネットを利用してコミュニケーションをする頻度とその内容、夫婦関係、夫の育児・家事頻度、本人の育児・家事頻度、母親の育児不安、育児充実感などである。

①母親のパソコンと携帯電話利用状況

携帯電話やパソコンをプライベートで利用する目的（複数回答）は、パソコンでは、情報サイト（92.9%）、メール（51.5%）が多く、携帯電話では通話（90.8%）、メール（98.2%）、情報サイト（46.8%）が多い。

またパソコンの一日当たりの利用時間について、利用時間は一時間未満である人は73.0%、同じく携帯電話の利用時間が一時間未満である人は82.3%となっている。

②母親のＩＴ利用によるコミュニケーションとネットワーク

母親の属性とIT利用との関連については、母親の年齢が低いほど、パソコン、携帯電話の１日の平均利用時間が長く、インターネット利用を「ストレスの解消になった」、「人間関係が広がった」と肯定的に認識する傾向が見られた。一方、母親の学歴が高いほど、インターネットの利用によって「家にいて用事が済むようになった」、「時間の短縮につながった」という肯定的な認識はあるが、同時に「時間が取られるようになった」、「人間関係を広げない」など否定的な認識をもつ側面も明らかになった。

次に、育児期の母親の IT 利用によるコミュニケーションとネットワークとの関連については、パソコンの利用時間が長いほど、対面かつ携帯電話を通じたコミュニケーションが減少する傾向が見られた。しかし、携帯電話の利用時間が長いほど、携帯電話を通じたコミュニケーションだけではなく、対面でのコミュニケーションをも増加させる。さらに IT を使ったインターネットの利便性を感じているほど、対面での人とのコミュニケーション、携帯電話を通じたコミュニケーションが多くなるという傾向が見られた。これらの結果から、携帯電話は日常的な育児サポートネットワークを有効に活用する手段として利用されていることが示唆された。

③母親の IT 利用と夫婦関係

母親の年齢が高いほど携帯電話やパソコンの利用時間が短く，夫との対面での会話時間も短い。そして母親の就労の有無は，携帯電話の利用時間や夫との対面での会話時間とは関係がみられなかったが、パソコンの利用時間については、専業主婦の母親の方が就業する母親よりも多いことが示された。

また、妻の携帯電話の利用時間が多いほど夫との対面での会話時間も多いが，パソコン利用による関係はみられない。一方，夫との対面での会話時間が多いほど、夫との育児に関する会話と携帯電話での連絡の頻度が多かった。

妻の携帯電話の利用時間が多いほど夫婦関係満足度は低いことが示された。しかし夫との会話時間が長く、育児に関する対面での会話やパソコンでのコミュニケーションが多いほど、妻の夫婦関係満足度が高いということが明らかになった。

考察として、妻の年齢と IT 利用時間については、妻の年齢が上がるに従い、子どもの数も増えて育児・家事量が多く，時間的に余裕がないことが推測された。一方，専業主婦の方が、パソコンの利用時間が長いのは，就労している妻よりも時間的に余裕があるからであろう。そして、妻の携帯電話の利用時間が長いほど、夫との対面での会話時間が多いのは，携帯電話の利用によるネットワークの広がりや情報により話題も豊富になることが推察される。しかし、妻の携帯電話の利用時間が長いほど夫との育児に関する対面での会話が少ないのは、妻は育児に関して友人や親族とコミュニケーションを取ることで、夫とは育児についての会話はあまり必要としていないことが考えられる。さらに，IT 機器の種類によって夫婦の対面での会話時間や頻度に対する関連の違いがみられたが，携帯電話利用に関連性があり、パソコン利用に関連性が見られなかったことはパソコン利用と比較して携帯電話利用の手軽さと普及率が高いからではないかと考えられる。

夫との対面での会話時間が長いほど、夫との携帯電話でのコミュニケーションや育児に関するコミュニケーションが多く、IT 利用が夫婦の育児協力にプラスに作用する一側面を示唆していると考える。更に、妻の夫婦関係満足度を高める要因は、夫との対面での会話時間，育児に関する対面での会話頻度が高いことである。その他にもパソコンを使った夫との育児に関するコミュニケーションも見られたが、対面での会話の多さが夫婦関係満足度に強い影響があることが示され，妻にとって、IT を通じてよりも夫との直接的な会話が夫婦関係により良い影響を与えていることが示唆された。

④母親の IT 利用と親族ネットワーク

分析の結果、親との対面・IT 利用ネットワークコミュニケーション頻度は、親の年齢や居住関係と関連がみられ、実親か義親かによっても異なっていることが明らかになった。母親自身の母親の年齢が若いほど、携帯電話を使ったコミュニケーションが多い。そして母親自身の携帯利用期間が長いほど、親との携帯電話を用いてのコミュニケーションを頻繁に行っていることから、親（特に自分の母親）が若く、自分が長く使用している携帯電話を親も利用できる状況にある場合、携帯電話を使用して頻繁にコミュニケーションをとることが伺えた。また親の居住地が近いほど、母親自身の父親、母親に実際に会う回数が多い。親が近くに住んでいるということ

は、会う機会を多くするが、携帯電話やパソコンを用いてのオンライン・ネットワークと居住距離には関係が見られなかった。

相手が夫の親の場合、義母の年齢が若いほど、実際に会ったり、携帯電話でのコミュニケーションは多いが、義父にはそのような傾向は見られなかった。義母の場合は、居住距離が近ければ連絡や用事などに携帯電話を頻繁に使用するが、居住距離が遠い場合には「すぐに連絡できる」携帯電話は日常的に使用する必要性がないことが考察できる。これらの結果、義親と実親の差異が IT 利用による親族ネットワークでの大きな特徴であることが示唆された。

⑤母親の IT 利用と育児不安、育児充実感

育児期の母親において、パソコンや携帯電話の IT 利用時間が長く、IT を使うことで「時間の短縮につながった」、「人間関係が広がった」といった有効性を感じているほど、育児についての連絡や相談など IT ネットワークを通じて行うことが多くなり、それを介して実際に会って育児に関する会話をすることも多くなっていることが明らかになった。そして、実際に会って育児に関するネットワークを強めることは、母親の育児に関する充実感を高める。また、携帯電話を介したネットワークが、パソコンでのネットワークよりも実際に会う機会を多くするという結果が示された。このように IT の種類によっても結果の相違が見られた。

これらの結果から、育児期の母親は、子どもの年齢が低いために外出や人と会うことが制約されがちであるが、パソコンや携帯電話での IT ネットワークを利用して、育児の情報を得る、育児に関する連絡を取り合う、育児の悩みや心配事を相談していることが明らかになった。そして IT ネットワークを多く活用することが、実際に会うというネットワークを拡大させ、育児や子育てを共通の話題とする人たちとつながりの機会を提供し、更に、母親の育児に関する充実感が高められることが示唆された。

（４）成果に対する意義、インパクト

本研究の成果は、二つの点で意義、インパクトがある。ひとつは、我が国の育児期の母親を対象にして、IT 利用とソーシャルサポートネットワークや家族との関係性について、新たな知見を蓄積できたことである。乳幼児をもつ母親の研究蓄積は多いが、現代社会における IT 利用が母親のサポートネットワークや家族とのつながりに関連があると示したことは新規性があり、かつ育児期の母親支援活動に対しても重要な示唆を得ることができたと考えている。

ふたつ目は、日米での比較を通じて、我が国の母親の IT 利用の特徴が示された点である。我が国では、かねてより地域や行政において育児支援活動が促進されている中、今回のインタビュー結果からは、IT 利用においても地域や母親仲間の実際のコミュニティがベースになっている様子が見られた。この点において、IT 利用により得られた地域での子育てネットワークに支えられながら、多くの母親は社会とのつながりを保っていることが示されたことは重要である。

（５）今後の展望、研究課題

今後の展望、研究課題は次の 4 点である。

①育児期の父親

本研究では、我が国の現状において主に育児を担う母親の育児感情と IT 利用について明らかにしてきたが、父親の育児参加が社会的に求められている中で、父親も対象にして研究をすべきであると考えている。また母親と父親での相違も検討していきたい。

②世代間関係

今回の研究では、研究対象者を育児期の母親としたため、その母親の親世代、つまり祖父母世代への調査を行わなかった。高齢社会である我が国おいて、祖父母世代へも焦点を当てた世代間での家族関係と IT 利用についても展開していく必要があるだろう。

③IT 利用と地域性

今回の対象者は、首都圏在住の母親であった。IT 利用や子育ての環境は地域によっても差異があることが考えられるため、今後は地域性も検討するために首都圏以外での地域でも研究を行いたい。

④諸外国との比較

日本とアメリカに加え、社会・政治・経済事情は異なるがインターネットや携帯電話の利用頻度が高い韓国と中国の育児期の親のインターネット利用の実態とサポートネットワークとの関連について調査を拡大することを今後の研究課題として考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

① 石井クンツ昌子　父親の役割と子育て参加: その現状と規定要因、家族への影響について、季刊家計経済研究、81、2009、16－23、査読無.

② 牧野カツコ　What is Happening to Japanese Family Today: Recent Family Changes in Japan. *Journal of Korean Association of Family Relations*、13、2008、1-10、査読無.

③ 牧野カツコ　家庭科の魅力と威力、家庭科研究部会誌、51、2008、16－41、査読無.

④ 石井クンツ昌子　ワーク・ファミリー・バ

ランス：日米の研究から、家族関係学、26、2007、29－42、査読無.

⑤ 石井クンツ昌子　父親をめぐるシンポジウム：LaRossa 氏を囲んで、家族社会学研究、18、2007、84－86、査読無.

⑥ 石井クンツ昌子　日本における家族社会学研究の国際化に向けて、家族社会学研究、18、2007、42－54、査読無.

⑦ 石井クンツ昌子　大学教育の日米比較、生活社会科学研究、14、2007、81－92、査読無.

⑧ 牧野カツコ、家庭科での保育教育の充実を、幼児教育、106、2007、4－7、査読無.

⑨ 牧野カツコ、現代家庭の特質と家庭教育、日本教育、360、2007、6－9、査読無.

〔学会発表〕（計 15 件）

① 石井クンツ昌子・牧野カツコ　The Use of the Internet Technology and its Effect on Parenting Satisfaction in Japan. National Council on Family Relations, 2009 年 11 月 13 日、米国、サンフランシスコ.

② 石井クンツ昌子　英語ワークショップ～社会学の研究論文発表と投稿について～、日本社会学会、2008 年 11 月 22 日.

③ 石井クンツ昌子・牧野カツコ・加藤邦子・ユンジンヒ　The Use of Technology and Parents' Informal Support Networks in Japan and the U.S.A. National Council on Family Relations、2008 年 11 月 8 日、米国、リトルロック.

④ 牧野カツコ　Japanese Families in Transition: Results of Six–Country Comparative Research: Recent Family Changes and Child Care in Japan: An Overview of Six-Country Comparative Research. National Council on Family Relations、2008 年 11 月 6 日、米国、リトルロック.

⑤ 石井クンツ昌子　Sharing of Housework and Childcare in Contemporary Japan. Expert Group Meeting, United Nations, 2008 年 6 日、スイス、ジュネーブ.

⑥ 牧野カツコ　Effects of Families Background on Student's Helping Behavior、100th World Congress. International Federation for Home Economics(IFHE), 2008 年 8 月 2 日、スイス、ロザンヌ.

⑦ 石井クンツ昌子　Japanese Father's Involvement and their Adolescent Children's Psychological Well-being: A Longitudinal Study. National Council on Family Relations、2007 年 11 月 8 日、米国、ピッツバーグ.

⑧ 牧野カツコ　International Comparative Study on Father's Child Care. National Council on Family Relations、2007 年 11 月 8 日、米国、ピッツバーグ.

⑨ ユンジンヒ、劉楠　育児期の母親のＩＴ利用によるコミュニケーションとネットワーク、日本家族社会学会第 19 回大会、2009 年 9 月 13 日、奈良女子大学

⑩ 花形美緒　育児期の母親の IT 利用が親族ネットワークに与える影響について、日本家族社会学会第 19 回大会、2009 年 9 月 13 日、奈良女子大学.

⑪ 佐々木卓代 育児期の母親のＩＴ利用と夫婦関係、日本家族社会学会第 19 回大会、2009 年 9 月 13 日、奈良女子大学.

⑫ 中川まり 育児期の母親のＩＴ利用と育児不安・育児充実感との関連、日本家族社会学会第 19 回大会、2009 年 9 月 13 日、奈良女子大学.

⑬ 中川まり The Effect of the Internet Use on Japanese Mothers' Childcare Stress and Anxiety. National Council on Family Relations, 2009 年 11 月 13 日、サンフランシスコ

⑭ 佐々木卓代 Marital Quality and Communication and the Internet Use in Japan. National Council on Family Relations, 2009 年 11 月 13 日、サンフランシスコ

⑮ 花形美緒 The Internet Use and Family Support Networks in Japan. National Council on Family Relations, 2009 年 11 月 13 日、サンフランシスコ

〔図書〕（計４件）

① Sally Lloyd, Katherine Allen, April Few、Sage Publications、Handbook of Feminist Reflections in Cross-Cultural Family Studies. 2009 年、416 頁（石井クンツ昌子 250-273 頁執筆）

② 柏木惠子・高橋惠子、有斐閣、『日本の男性の心理学』2008 年、314 頁（牧野カツコ 191-195 頁執筆）

③ 耳塚寛明・牧野カツコ（共編著）、金子書房、『学力とトランジッションの危機』2007 年、206 頁（第 6 章　牧野カツコ 105-124 頁執筆）

④ 耳塚寛明・牧野カツコ（共編著）、金子書房、『学力とトランジッションの危機』2007 年、206 頁（第 7 章　石井クンツ昌子 125-142 頁）

６．研究組織

(1) 研究代表者

石井クンツ　昌子（Ishii-Kuntz　Masako）
お茶の水女子大学
大学院人間文化創成科学研究科・教授
研究者番号：７０４３２０３６

(2) 研究分担者

牧野　カツコ（Makino　Katsuko）
お茶の水女子大学
大学院人間文化創成科学研究科・名誉教授
研究者番号：７０００８０３５